



財団概要

1 沿革

本財団の母体となった病態代謝研究会は昭和44年（1969年）に山之内製薬からの寄付を基金として発足し（趣意書を55ページに掲載）、疾患の成因の生化学的さらには分子細胞生物学的な研究および薬剤の生体内代謝の研究に助成金を交付し、がん、生活習慣病をはじめとする各種疾患の機序解明、治療薬の進歩に貢献してまいりました。

平成17年4月山之内製薬と藤沢薬品工業とが合併しアステラス製薬の誕生にともない、藤沢薬品工業が主たる出捐（公益法人等に寄付をする）企業であった医薬資源研究振興会の事業を病態代謝研究会が継承する形で平成19年4月にその残余財産を引き継ぎました。医薬資源研究振興会は、昭和21年（1946年）に設立され、昭和47年以降、薬のシードとなる新たな天然物を中心とする創薬資源の探索と応用研究に助成し、我が国の創薬探索を支援してまいりました。新生「病態代謝研究会」は、疾患の機序解明と創薬資源研究を融合的に進め、病気のメカニズムを踏まえ、分子標的に対する多様性をもった創薬資源からの画期的新薬の開発、および臨床における安全性と経済性の整合的な利用を開発する研究を助成する活動を行っています。

平成20年12月1日からの公益法人改革関連三法（新法）施行に向けて、ほぼ1年前の平成20年1月から財団事務局として公益財団法人への移行検討を開始しました。その後、移行検討会を立ち上げて議論を重ね、6月21日開催の理事会で公益財団法人への早期移行を決議、新法施行後の平成21年1月7日に厚生労働省に「最初の評議員選任に関する許可申請書」を提出、4月20日に許可を得て4月28日最初の評議員選定委員会開催、5月28日に移行申請書を内閣府公益認定等委員会に提出しました。7月16日の公益認定等委員会による第1回ヒアリング後、幾多のやり取りを経て平成22年3月23日に内閣総理大臣より認定書を拝受致しました。平成22年4月1日に公益財団法人への移行登記を行い、移行申請書通り「アステラス病態代謝研究会」と財団名称も変更いたしました。平成26年度は公益財団法人移行後、5年目となります。

2 目的

本財団は、生命科学研究、とりわけ創薬・治療法の開発・実用化研究を奨励し、国民の保健と医療の発展および治療薬剤の進歩に貢献することを目的としております。

3 事業内容

本財団は、前項の目的を達成するために、以下の公益目的事業を実施しています。

1) 交付事業（研究助成金および海外留学補助金）

<研究助成金>

生命科学領域全般（有機化学、天然物化学を含む）を対象に、日本国内で実施される「疾患の解明と画期的治療法の開発に資する研究」あるいは「臨床的意義の高い成果が期待される研究」を助成します。特に、「個人型研究を推進する研究者」、「女性研究者」、「教室を立ち上げたばかりの研究者」、「留学から帰国したばかりの研究者」の支援に注力します。

<海外留学補助金>

将来の日本の生命科学（有機化学、天然物化学を含む）の発展に貢献できる人材を育成することを目的として、基礎的な研究能力を修得した日本人研究者が海外の研究機関に身を置き、加速化する生命科学の変化を体感しながら、世界トップレベルの研究者と切磋琢磨するための留学を支援します。

<助成交付者数・交付金額>（病態代謝研究会のみの累計）

項目	期間	交付者数	交付金額（千円）
研究助成金（研究奨励金）	S44年（設立）～H26年度	3,150名	2,473,300
海外留学補助金	S58年度～H26年度	406名	347,600
総計		3,556名	2,820,900
最優秀理事長賞（副賞）	H16年度～H26年度	（25名）	25,000
竹中奨励賞（副賞）	H24年度～	（3名）	1,500

注1：最優秀理事長賞および竹中奨励賞は副賞ですので研究助成金とは別に集計。ただし、これらも公益目的事業の一環として実施していますので、助成総額は副賞も含め2,847,400（千円）とさせていただきます。

注2：平成19年4月に事業継承した医薬資源研究振興会（医資研）分<1,357名、1,223,900（千円）>との合算累計：交付者数：4,913名、交付額：4,071,300（千円）

注3：平成23年度は、東日本大震災の被害に遭われた研究者の早期復興を願い緊急研究助成金を公募により交付しました。これら<94名、21,350（千円）>も合わせると助成交付累計は、交付者数：5,007名、交付額：4,092,650（千円）となります。

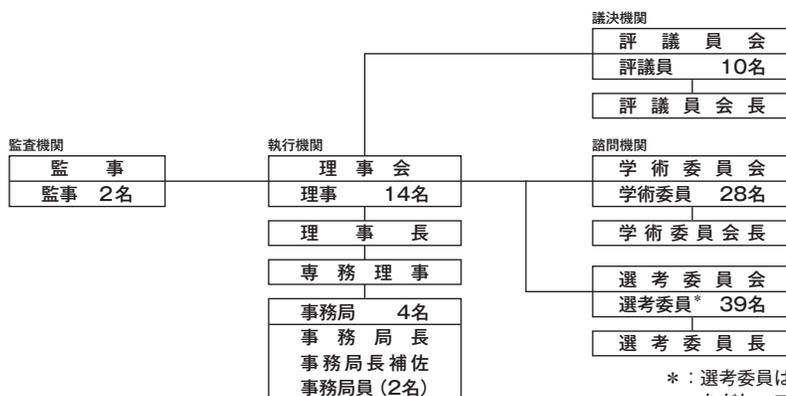
2) 研究報告会

前年度に交付した研究助成金により実施された研究の成果発表を目的に、毎年10月に研究報告会を開催しています。特に優れた成果を挙げたと認められた研究に対し最優秀理事長賞を、また、今後の活躍が期待される若手研究者に竹中奨励賞を、授与しています。あわせて、本財団役員等による講演会も実施しています。平成26年度より研究発表者の相互投票に基づき優秀発表賞を授与しています。

3) 刊行物

- (1) 財団報：本財団の一年間の活動をまとめて、機関誌として発行。
- (2) 助成研究報告集：助成期間の研究成果を研究報告会から約1年5カ月後に研究年報として発行。

4 組織と人員（平成27年3月31日現在）



*：選考委員は、理事、学術委員で構成される。
ただし、アステラス製薬関係者は除く

5 評議員・役員・学術委員・職員名簿 (平成27年3月31日現在) (五十音順・敬称略)

■評議員
評議員会長
評議員

野木森 雅郁
相川 直樹
大隅 典子
岡島 悦子
須田 年生
土井 健史
長澤 寛道
長嶋 憲一
中村 正彦
野田 哲生
アステラス製薬(株) 代表取締役会長
慶應義塾大学 名誉教授
アステラス製薬(株) 社外取締役
東北大学大学院 医学系研究科 教授
(株)プロノバ 代表取締役
アステラス製薬(株) 社外取締役
慶應義塾大学 医学部 教授
大阪大学大学院 未来戦略機構 部門長
大阪大学大学院 薬学系研究科 教授
東京大学 名誉教授
東京21法律事務所 弁護士
中村正彦税理士事務所 税理士
(公財)がん研究会 常務理事
(公財)がん研究会 がん研究所 所長

■理事
理事長

専務理事
理事(兼 選考委員長)
理事(兼 学術委員長)
理事

児玉 龍彦
内田 渡
門脇 孝
後藤 由季子
一條 秀憲
大谷 直子
小川 久雄
倉田 利明
倉智 嘉久
袖岡 幹子
竹内 誠
中里 雅光
中山 俊憲
藤井 信孝
東京大学 アイソトープ総合センター センター長
東京大学 先端科学技術研究センター 教授
アステラス製薬(株) 執行役員
東京大学大学院 医学系研究科 教授
東京大学大学院 薬学系研究科 教授
東京大学大学院 薬学系研究科 教授
東京理科大学 理工学部 教授
熊本大学大学院 生命科学部 教授
国立循環器病センター病院 副院長
東京大学大学院 薬学系研究科 教授
大阪大学大学院 医学系研究科 教授
理化学研究所 主任研究員
アステラス製薬(株) 執行役員
宮崎大学 医学部 教授
千葉大学大学院 医学研究科 教授
京都大学大学院 薬学研究科 特別教授

■監事

大谷 剛
古川 康信
アステラス製薬(株) 常勤監査役
古川康信公認会計士事務所 公認会計士

■学術委員
学術委員長(兼 理事)
学術委員

後藤 由季子
稲葉 俊哉
井上 将行
今井 由美子
志成 上杉
上田 啓次
浦野 泰照
大嶋 孝志
小川 佳宏
尾崎 紀夫
笠井 清登
熊ノ郷 淳
衆 昭苑
佐々木 雄彦
塩見 美喜子
広 美
竹居 孝二
徳山 英利
中澤 徹
根岸 学
別役 智子
舩森 直哉
南 雅文
三輪 聡一
柳田 素子
山下 敦子
山本 一夫
若槻 壮市
東京大学大学院 薬学系研究科 教授
広島大学 原爆放射線医学研究所 所長・教授
東京大学大学院 薬学系研究科 教授
秋田大学大学院 医学系研究科 教授
京都大学 物質-細胞統合システム拠点 副拠点長
京都大学 化学研究所 教授
大阪大学大学院 医学系研究科 教授
東京大学大学院 薬学系研究科 教授
九州大学大学院 薬学研究院 教授
東京医科歯科大学 医歯学総合研究科 教授
名古屋大学大学院 医学系研究科 教授
東京大学大学院 医学系研究科 教授
大阪大学大学院 医学系研究科 教授
東京工業大学大学院 生命理工学研究科 教授
秋田大学大学院 医学系研究科 教授
秋田大学 生体情報研究センター センター長
東京大学大学院 理学系研究科 教授
東京大学大学院 医学系研究科 教授
岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 教授
東北大学大学院 薬学研究科 教授
東北大学大学院 医学系研究科 教授
京都大学大学院 生命科学研究科 教授
慶應義塾大学 医学部 教授
札幌医科大学 医学部 教授
北海道大学大学院 薬学研究科 教授
北海道大学大学院 医学研究科 教授
京都大学大学院 医学研究科 教授
岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 教授
東京大学大学院 新領域創成科学研究科 教授
米国SLAC国立加速器研究所 光科学部門 教授
スタンフォード大学 医学部 教授

■職員
事務局長
事務局長補佐
事務局長

茅切 浩
尾崎 まり子
石川 弘
中西 朋恵
アステラス製薬(株)
同上
同上
同上

6 ご退任役員等（五十音順・アステラス製薬関係者は除く）

評議員 磯部稔氏（名古屋大学名誉教授）



磯部稔氏は、平成7年4月から平成18年まで医薬資源研究振興会の選考委員と理事を歴任後、平成19年4月の病態代謝研究会（病態研）への事業統合時に病態研の理事に就任されました。平成22年4月からは（公財）アステラス病態代謝研究会の評議員に就任されました。平成26年6月のご退任までの19年の長きにわたり、生命科学領域での本財団の果たすべき役割を示し、導いてくださいました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。（写真右は磯部稔氏 令夫人。）

評議員 大石佳能子氏（株式会社 メディヴァ 代表取締役社長）



大石佳能子氏は、平成24年6月に（公財）アステラス病態代謝研究会の評議員に就任されました。平成26年6月にご退任されるまでの2年間、特に、ご自身の留学体験を踏まえ、また、企業人として、本財団の留学助成のあり方、若い人達にどのように海外に眼を向けさせ、留学の意義を示し、海外留学補助金に応募して貰うか等につき、議論にご参加頂き、ご意見、ご指導を頂きました。女性評議員として貴重なご意見を頂きました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

監事 大山悦夫氏（税理士）



大山悦夫氏は、平成16年4月から平成22年3月まで病態代謝研究会の監事を歴任され、平成22年4月に（公財）アステラス病態代謝研究会の監事に就任されました。平成26年12月にご退任されるまで10年の長きにわたり、財団事業全般に眼を光らせて頂き、時に厳しく、時に優しく、常に一本筋の通ったご指導を頂戴しました。公益法人会計の導入に際しては、ご専門のお立場からご指導いただき、公益法人会計に早期に習熟できたのも大山氏のお蔭です。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

評議員 佐藤公道氏（京都大学名誉教授）



佐藤公道氏は、平成13年4月から平成19年3月まで、医薬資源研究振興会の選考委員を歴任後、平成19年4月の病態代謝研究会（病態研）への事業統合時に病態研の理事に就任されました。平成22年4月からは（公財）アステラス病態代謝研究会の評議員に就任され、平成26年6月のご退任まで13年間、常に大局的な見地から、財団のあるべき姿につきご意見を頂戴し、研究助成事業推進にご尽力頂きました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

評議員 杉山雄一氏（東京大学名誉教授）



杉山雄一氏は、平成11年4月から平成22年3月まで病態代謝研究会の評議員、理事を歴任後、平成22年4月に（公財）アステラス病態代謝研究会の評議員に就任されました。平成26年6月のご退任まで15年の長きにわたり、特に、創業における本財団の役割について、熱心に議論に参画くださり、ご意見を頂きました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

評議員 田嶋尚子氏（東京慈恵会医科大学名誉教授）



田嶋尚子氏は、平成22年4月に（公財）アステラス病態代謝研究会の評議員に就任されました。平成26年6月のご退任までの4年間、特に、ご自身のご経験を踏まえ、これからの女性研究者支援のあり方、海外留学助成のあり方について、評議員会のみならず、ワーキング・グループ会議にもご参画頂き、熱心にご議論頂きました。女性評議員として貴重なご意見を頂きました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

理事 泉二登志子氏（東京女子医科大学名誉教授）



泉二登志子氏は、平成21年4月から平成22年3月まで病態代謝研究会の評議員を歴任され、平成22年4月に（公財）アステラス病態代謝研究会の理事に就任されました。平成26年6月のご退任までの5年間、特に、臨床家のお立場から、臨床現場が抱える課題をお示しくくださり、臨床研究者をどのように励まし、日本の臨床研究レベル向上に結び付けるか等の議論にご参加頂き、ご意見を頂きました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

財団法人「病態代謝研究会」設立趣意書

近年医学の進歩は誠に目をみはるものがありますが、その原因の一つに医学的研究の手段として、物理的、化学的手段が大幅に導入されつつあることを挙げるのが出来ましょう。

医学の研究は、人体を形態的な面から追求することにより始まり、長い年月と多くの研究によって解剖学、組織学等の形態学が発達し、やがて、機能面の追及により、生理学が発達して、今日に至りましたが、生理学から、化学的分野が分化独立して、新しく生化学が体系づけられ、近代医学の基礎が作られました。

従来、形態学的、生理学的に捉えられていた疾病像が化学的に追求されるに及んで、人体に関する知識も革新され疾患の診断並びに、治療を、生化学的な目で見直す時期に到達いたしました。

その後、生化学の著しい進歩によって、生命の根底をなしている蛋白質の生合成、核酸の役割等が、次第に明らかになり、今や人体の機能は、分子の段階で解明されつつあり、分子生物学と呼ばれる新しい生物学も台頭してきています。

このような生化学の進歩に伴って、疾病の診断および治療上、生化学的所見が極めて重要な要素としてとりあげられるに至りました。

しかしながら疾病の把握は、病理学や病態生理学に生化学的視野を加えて、始めて完全となるのにかかわらず、生化学一般の目ざましい進歩発展に比し、病態それ自体の生化学的研究はまだ必ずしも十分体系づけられたとはいえません。従って現在各種疾患に対して更に高度な病態代謝学的アプローチが強く望まれております。

このような背景のもとで、私共は、疾病に代謝の面から光をあて、病態代謝学的研究を助成し、疾病の発生機序、体質および老化の機構を生体代謝または、分子生物学的観点より追及し、併せて、その治療薬剤との関係をもあきらかにすることにより、医学、延いては、薬学の未開の分野を開拓し、国民の保健および医療の進歩と病態生化学の体系化とに些かなりとも貢献することを期して、この度、財団法人「病態代謝研究会」を設立し、寄附行為記載のごとき事業を行なおうとするものであります。

（昭和44年7月31日 財団法人 病態代謝研究会 設立許可申請書より、漢字・送り仮名を含めすべて原文のまま転記しています。）

ご寄付の報告とお願い

平成26年4月から平成27年3月の1年間に、本財団の目的に沿った優れた研究の奨励の一助にと、下記の通りご寄付をいただきました。頂戴しましたご寄付は研究助成事業の推進のため有効に活用させていただきます。

アステラス製薬株式会社 様	90,000,000 円
茅切 浩 様	10,000 円
石川 弘 様	10,000 円

本財団は今後とも研究助成事業を通して、より幅広く生命科学分野の研究に貢献して参る所存ですが、そのためには更なる事業基盤の充実が必要です。こうした趣旨をより多くの皆さまにご理解いただき、本財団へのご寄付について格別のご配慮を賜りますようお願いいたします。

なお、本財団など公益財団法人は、教育または学術の振興、文化の向上、社会福祉への貢献その他公益の増進に著しく寄与するものとして認定された法人で、これら法人に対して個人または法人が寄付を行った場合は、その個人・法人ともに税法上の優遇措置が与えられます。詳しくは本財団事務局まで、電話：03-3244-3397、あるいはEメール：byoutai@jp.astellas.com などでお問い合わせください。

平成26年度の財団活動トピックス

海外助成事業改革の議論

第1線の研究者が抱える問題点を把握しながら、日本の生命科学研究の方向性を見据え、研究者へのタイムリーかつ効果的な助成策を見出していくことを本財団はとても大切にしています。この観点から海外留学助成事業について、各種会議にて約半年間議論を重ね、その結果を踏まえ、平成27年度海外留学補助金応募要領（案）が2月7日の理事会で承認されました。その骨子は、①リスクをとって海外で世界トップレベルの研究者と切磋琢磨しようとする日本人研究者をより強力に応援すべく、助成金を200万円から最大で400万円へ増額すること、②面接を実施して本人の意欲を確認しつつ激励すること、③帰国後に研究成果報告会での報告を求めることです。

上記は本財団報からは読み取りにくい部分ですので、あえてここに記載させて頂きました。

研究報告会での優秀発表賞

若い研究者には、「自分の研究成果を分かり易く発表する場を提供するとともに、他の分野の発表の議論に参加し、他の研究者を評価する経験を積んでもらう場の提供が必要」との選考委員の判断から、優秀発表賞の授与が平成26年度から開始となりました。

第1回優秀発表賞の受賞者を研究報告会後の交流会（意見交換会）で発表しました。研究報告会当日、推薦理由を事細かく推薦用紙に記載してくださった研究発表者の方が多く、研究発表者の皆様は他の発表を熱心に聞いてくださったことが良く分かりました。また、交流会は従来昼食時に実施しておりましたが、研究発表がすべて終了した最後に開催しました。会場は意見交換する熱心な研究者で一杯となり、大変好評でした。

評議員・役員・学術委員・職員 人事関係

平成26年度は評議員、理事、監事、学術委員の改選期にあたり、大きな役員の異動がありました。また、事務局長が交代しました。

① 6月7日

学術委員：一條秀憲氏、大隅典子氏、大谷直子氏、袖岡幹子氏、中山俊憲氏（以上、辞任）
浦野泰照氏、糸 昭苑氏、中澤 徹氏、別役智子氏（以上、就任）

事務局長：石川 弘氏（辞任）、茅切 浩氏（就任）

② 6月23日

評 議 員：磯部 稔氏、大石佳能子氏、佐藤公道氏、杉山雄一氏、田嶋尚子氏（以上、辞任）
大隅典子氏、岡島悦子氏、須田年生氏、土井健史氏、長澤寛道氏（以上、就任）

理 事：須田年生氏、塚本紳一氏、長澤寛道氏、廣崎晴久氏、泉二登志子氏（以上、辞任）
一條秀憲氏、大谷直子氏、袖岡幹子氏、竹内 誠氏、中山俊憲氏（以上、就任）

監 事：樫井正剛氏（辞任）、大谷 剛氏（就任）

③12月31日 監事：大山悦夫氏（辞任）、古川康信氏（就任）

編集後記

ここに、アステラス病態代謝研究会の機関誌「財団報」の第8号（平成26年度版）を発行することができました。これもご協力頂いた皆様のお蔭です。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

児玉理事長にはご挨拶を頂戴しました。事務局の「急ぎお願いします」との無理なお願いにも、いつも快く応じてくださることに感謝しております。

平成26年度下半期に海外事業改革の議論を終え、平成27年4月1日に従来とは異なる、新しい海外留学補助金応募要領を公開しました。児玉理事長は「海外留学補助金改革はまだ道半ば」との思いがあると私は感じております。引き続き、理事長をはじめ役員の皆様の熱い議論に参加できることを楽しみにしております。

最優秀理事長賞・竹中奨励賞・優秀発表賞受賞者、研究助成金・海外留学補助金交付者の、ご寄稿をお願いした皆様全員からお便りを頂戴できました。無理なお願いにもかかわらず、大変にお忙しい中、時間をとってご寄稿・お写真をお届けくださいましたことに感謝申し上げます。

どのご寄稿からも、ご苦勞はあっても、「研究が大好きで、研究仲間が大好き」、とのメッセージが私に伝わって参ります。海外留学中の皆様からは、それに加えて、海外生活ならではの悩みもご紹介くださり、拝読しながら、「今が頑張りどころですよ。」「そんなに急に言葉はうまくなりませんよ。ゆっくりいきましょう。」などど、ご寄稿文に語りかけている自分に、ハッと気が付く場面もございました。私は通算約13年海外駐在（米国、オランダ、フィリピン）をしておりました。ですから、海外留学中の皆様には、特別な想いがあります。大声援を送ります！

平成26年度は評議員・役員・学術委員の改選期にあたり、多くの役員等の異動がございました。ご退任された役員等と財団との関わりを本財団報に掲載させて頂きました。文章を書きながら思い出すことは、叱られたことの方が（お褒めにあずかったよりも）遥かに多かったなあ、ということです。。（笑い。）本財団は誠に勝手な財団で、ボランティア（無給）にて役員等を皆様をお願いしております。にもかかわらず、お休み返上で各種会議にご出席くださり、熱心に議論に参加して下さるお姿を拝見して、私はいつも頭が下がる思いでございました。ご指導いただきましたことを大切に、役員の皆様に負けぬよう、後任の茅切事務局長を支援しながら、今後の財団運営に励んで参ります。

末筆ながら、株式会社ベスト・プリンティングの小堤さんには当方の編集の意図を読み取り、無理な注文にもいやな顔をひとつせず、立派な財団報を今回も作成して下さりました。深く感謝申し上げます。なお、本財団報掲載の花・海の写真は茅切事務局長からご提供頂きました。御礼申し上げます。

事務局長 石川 弘
(2015年8月記)

財団報 No. 8

非売品

発行	2015年9月18日
編集	石川 弘
発行者	児玉 龍彦
発行所	公益財団法人 アステラス病態代謝研究会 〒103-8411 東京都中央区日本橋本町2-5-1 TEL: 03-3244-3397 FAX: 03-5201-8512 E-mail: byoutai@jp.astellas.com http://www.astellas.com/jp/byoutai/index.html
印刷所	株式会社 バスト・プリンティング

不許複製 禁無断転載